



偶成

少年易老学難成 一寸光陰不可輕 未覚池塘春草夢 階前五葉已秋声

少年老い易く 学成り難し 一寸の光陰 軽んずべからず
池塘の春草の夢 未だ覚めやらずして 階前の五葉 すでに秋

「朱喜（朱子）」の有名な漢詩ですから、ご存知かと思いますが、『少年は老い易いが学問は成り難い。それ故に一寸の光陰でもおろそかにしてはならぬ。さて池のつつみに春草の生い出たのを夢みて、楽しみ暮らしているうちに、いつか階（きざはし）の前の青桐の葉には、秋風の立つのを聞くようになる。歳月の去ること速やかなのは驚くべきである。（凱山流詩吟教本より）』という意味です。

時間を大切にしようと思っているのですが、本当に月日の経過は早いもので、まだ先だと思っていた「2007年問題」がそこまでに迫ってきました。「2007年問題」とは、2007年に団塊の世代が定年を迎えて大量の退職によって様々な問題が発生するという事です。

また、「団塊の世代」とは、第二次大戦後、1947年から1951年頃に生まれた人が多いことから、この5年間を一つにして堺屋太一さんが「団塊の世代」と命名しました。

私は、1948年生まれ「団塊の世代」ですが、1月生まれですから、1947年生まれと同じ世代、来年の同窓会は退職後の話で盛り上がるのではないかと思います。

その「団塊の世代」が、退職後の趣味の一つに挙げているのが、「蕎麦うち」だそうです。

蕎麦を打つ人が増えて、蕎麦うち道具が売れているのも、団塊の世代の人の影響かと思われるます。

私もご他聞に洩れず、2年前から「蕎麦うち」を何名かの仲間とやっています。

私は「蕎麦」は大好きです。しかし、家庭で料理はほとんどしたことがなく、食べる方なので、自分で打つことに興味はありませんでした。

随分前になりますが、黒羽で「蕎麦うち体験」に参加したことがあります。初めての経験でしたが、食べられる蕎麦を打つことができました。もっとも肝は師匠にやってもらいましたから自分で打ったということではありません。夢中だったので、どんな工程だったのかはすっかり忘れてしまったのですが、そば粉から麺ができることが不思議だったので、一人で蕎麦を打ってみたいと思ったのが「蕎麦うち」の始まりです。

やってみると、不器用なせいとか悪戦苦闘の連続でなかなかうまくなりません。

もっぱら、家では行わず、仲間と一緒に数ヶ月ごとに行っていますので、材用の配分や、菊練り方法、のし方など、忘れてしまい、一からやり直しといった具合で、いつまで経っても初心者域から出ることができません。

習いものは、短期間に集中することがコツですから、練習を重ねればいいのですが、家でやろうとすると、家族の者に反対されて挫折しています。

去年は、種まきから収穫までを行っている「そばの会」に入って「年越しそば」とはりきっていたのですが、挫折をしてしまいました。

10月に、蕎麦をその日に石臼で挽いた粉を販売している蕎麦工房・夢の岡本さんにお会いしました。この方は私と同じ団塊の世代で元宝石屋さんです。

今年の年越しは岡本さんのおいしいそば粉で年越しそばにチャレンジしようと思っています。



ものがたり伝記シリーズ 第十回 石田 梅岩④

このコーナーでは(株)登龍館から出版されている"ものがたり伝記シリーズ"より、歴史上に名を残した先人たちの偉業をご紹介します。

また、自分をふり返り、
「わたしは、生まれつき理屈者で、幼いころは、よく友だちに嫌われました。十四、五歳のとき、自分の癖や性分に気づきました。三十歳代になって、そういう癖がすこしは直ったようでしたが、四十歳になっても、まだ、ほのかに残っていました。

ところが、五十歳をこえてからは、そうした意地悪い理屈っぽさが、ほとんど無くなったようです。」

近くに火事があると、梅岩先生は、たいへん心配されました。

人の苦しみや悩みを、見すごすわけにはいきませんでした。

ある冬の夜のこと、京都の岡崎村で大火事がありました。寒い夜中のことでしたから、たいへん困っているだろうと、急いで門人たちと、おにぎりを作り、岡崎村の人たちに、施しをされました。

また、天災によって、お米が不足し、困った人びとのためにも、門人たちに呼びか

けて、よく尽くされました。

ある学者が、梅岩先生に尋ねました。

「先生は、門人を教えみちびくのに、心のあり方を、根本として教えられるのですか。」

「そうではありません。毎日の生活のあり方と行いを、第一をしております。」

と、先生は答えられ、朝起きてから、夜寝るまでの、行いを正すことから、始められました。

しだいに、梅岩先生の教えを慕う人門人が、各地にあらわれ、人から人へと、伝わりました。

商人だけでなく、いろいろな職業の方にも、先生の教えが、しみわたり、いつしか、それが「石門心学」と呼ばれるようになりました。

おわり

(株式会社登龍社『ものがたり伝記シリーズ 石田梅岩』より)